

王であるキリスト  
福音朗読 ルカ 23・35-43

2022.11.20

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

ミサの初めにも申し上げましたが、今日は「世界青年の日」に当たっています。「世界青年の日、ワールドユースデー」というのは、何年かに一度世界のどこかに青年たちが何十万人も集まって、教皇様も参加して1週間行われる大会がありますけど、そのことだけを指しているわけではありません。毎年実は「世界青年の日」というのがあります。今までは「枝の主日」だったんですけど、何年か前からこの「王であるキリスト」の年間最後の日曜日に移りました。そして、毎年ワールドユースデー、世界青年の日に当たって、教皇様は若者たちに向けてメッセージを出されます。

今年の教皇様のメッセージのテーマは、マリア様がお告げを受けたときに、自分のことばかりじゃなくて「あなたの親類のエリザベトも身ごもっている。もう6か月だ」という天使の言葉を聞いて、すぐにその高齡のいとこの所に出かけて行った、そういう場面を黙想しながら教皇様が語っていらっしゃるわけです。救い主の母になるという特別なそして予想もしなかった未知の体験の中であって、マリア様も自分のことで頭がいっぱいになっても不思議ではない、そういう中で、でもエリザベトのことを思って出かけて行った。自分の直面している課題の中だけに留まることなく、ということに焦点を当てられて、「わたしたちもそのような者でありたいですね」というのが教皇様のメッセージを簡単に言えばそういうことになると思います。

教皇様は、「今の世界はそのような若者を必要としてるんです」とっておっしゃるわけですが、それは若者だけではないわけです。わたしたちが今日お祝いしている「王であるキリスト」の祭日との関連で言うならば、「王であるキリスト」の王様っていうのは、わたしたちの事情に関係なく自分の用を言いつけてくるっていう人間の王ではなくて、すべての人に対して配慮し、導かれる方っていう意味での王なんですけども、わたしたちもその王であるキリストの心を一人ひとりの中に分かち与えていただきながら、イエス様がされようとしていることを手伝うことができますように、というのが、今日のミサのテーマと言えらると思います。これはまあ毎週のミサもそうですね、ミサのたびごとにみんなそれぞれ自分のお家から出てきてここに集まるっていうのは、ミサがここでしかやってないからっていう外的な意味ではなくて、みんな自分の

関心とか自分の心配事から出て、神様の前に立ち、そして一人ひとりの中にイエス様をお迎えして、またそれぞれの現実に戻って行くっていう、そういう意味があります。

だから、少なくともこのミサの間だけは自分のいろんな心配事とか関心というのは一旦横に置いて、そして、今この世の中、世界のために、また助けを必要としている人々を思いやりながら、他の人々のために祈るというのが、ある意味ではミサの趣旨、つとめと言って良いんじゃないかと思うんです。だから、共同祈願はとっても大切なわけです。

わたしたちは一人ひとりの自分のいろんな人生の課題に直面しているから、自分の関心の中にずうっと入っていくっていうのは自然なことだし無理からぬことなんですけども、でも神様の助けによってその自分の心配事や関心事から出てくるっていうのが、ある意味でミサの意味であると言っていいように思います。

「自分はお祈りするのミサの中だけだから、その祈る時間帯の中で他の人のためには祈れませんよ」っていう方がもしいたとしたら、いらっしゃるかもしれませんね。わたしたちは内面は支配できないから、それは自由です。でも、そういう方でも、教会ってのは一つの身体ですから、今その方がそういうふうに関心の人に心を向けることができない瞬間でも、教会全体として他の部分が他の人のためにその人の分まで祈るから、やがて自分の中から出て来ることができるようになったときには他の人のために祈る祈りに加わってほしい、そういう思いで一緒に祈るわけですよ。

もちろん、一人ひとりの人生の課題を直視し、担わなければならないのも事実です。現実逃避としての、自分のそういう向き合わなければいけない課題から目を逸らすために「世界語り」とか、他の人のことにばかり首をつっこむ、そういうこともありうる。「ボランティアするより部屋を片付けろ」って川柳があるぐらいだから。だけど、そうではなくて本当にふさわしい形で他の人に心を向ける、今日の福音の中でイエス様と一緒に十字架に架かっていた二人の人、片や、イエス様に対して「自分を十字架から降ろせ。十字架から救ってみろ」って、「自分を助けろ」ってそればかりなんですよね。でも、もう片やは、そのイエス様の身の上に起こっている出来事を思いやりながら、もう一回自分のことも振り返っている。そうしたときに、イエス様からの自分に対しての新たな救いへの道の言葉に出会いました。だから、わたしたちは自分の中に留まっていたならばそこから先は道が見えない。でも、他の人のことも思いやりながら祈り、そして繋がっていかうとするとときに、実は自分が直面している課題にも道が示される、そういう現実があるんじゃないかなと思います。

話が「世界青年の日」のメッセージに戻りますけども、教皇様は、マリア様がエリザベトの所に運んで行った一番大きなプレゼントっていうのは、もちろん実際の身の回りの世話とかそういうことをするっていう具体的な奉仕もあるけども、それにも増

して、実はご自分の胎内に宿っていらっしゃるイエス様を連れて行ったということ  
です、というふうにおっしゃってます。

わたしたちも今日これから一人ひとりの中にご聖体拝領を通してイエス様をお迎  
えします。だから、わたしたち自身が他の人に対してどのようにしていいのか分から  
ないしできないって思っている、でも一人ひとりの中にイエス様をお迎えして、出  
かけて行くならば、そのお迎えしたイエス様自身が働いてくれるし、必要ならばわた  
したちに何をすべきかを示してくださる、そのように信じていいんじゃないかなと思  
います。だから、わたしたちもマリア様のように一人ひとりの中にイエス様を宿すわ  
けですよ、このごミサのたびごとに。そうして、イエス様をわたしたちが会う人  
の所にお連れする、そのことを改めて思い起こしたいと思います。

そのようにして、今日、「王であるキリスト」、年間最後、来週からはもうクリスマ  
スを準備する待降節に入りますし、ミサの言葉も変わります。だから今日この言葉で  
捧げるのは最後ですよ。だから、かみしめながら、また、わたしたちをここに集めら  
れたイエス様の聖心を思い致しながら、このごミサを通して一人ひとりの中にまたイ  
エス様をお迎えしたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>